『主流』復刊のころ

宮　井　　敏

同志社英文学会誌『主流』は大平洋戦争の最も苛烈であった昭和十九年に第十号で休刊となり，終戦，戦後の四年のブランクを経て昭和二四年九月に復刊第一号を発行している．この，戦前の分と戦後の分の連続性については毎回議論があり，表紙には「復刊第×号」とし，中扉には通巻番号を入れるようなことをしたり，表紙には数字を入れず，中扉にのみ通巻番号を掲げるような事をしていたが，通巻第十七号（昭和二九年発行）からは通巻番号のみの記載となり，昨年発行の第四九号（吉岡義睦，Robert H. Grant, 貞方敏郎三先生の別冊追悼号三巻は別）に及んでいるわけである．

冊子の体裁は竹村寿夫（現姓金関）先生に叱咤されながら印刷工場へその都度足をはこんでいたのであるが，何しろ天才的な編集センスをお持ちの人だったから，印刷工場の隅で事務をとっている女性のカーディガンの色を見て「今度の表紙の色はあれで行く」と叫ぶような事も出て来るわけで，今とちがって印刷色インクの種類もそう豊富にあるわけでもなく，いくつかのインクをねり合さなければならなくなる．裏表紙には文字がないからこの「ねり」が不充分だと刷りむらが余計目立つことになりずい分気をもんだものであった．この「主流」と云う書体にも苦労した．明朝体は駄目だとおっしゃるので，宋朝体にしたのだが，これにも実は色々のスタイルがあり，「主」と云う画数の少ない文字にピッタリ来るものは「流」ではゴチャゴチャする，又はその反対であったりして仲々決まらず，ようやく現行の形に落着いたわけであるが，単に見馴れたせいばかりでなく，良い書体だったと今でも思っている．

このやり方は「白抜き」と云って，スミ色で刷る表紙の目次と誌名と地色

で三色の効果を狙ったものであるが，復刊後四十年，他大学の紀要論文集には類書がないものだから，全国の関係者の間では見馴れたものになっているのではないか，とひそかに自讃している次第である．

金関先生の原案は全体を「中とじ」と云う今週刊誌が使っている製本用式であり，事実復刊一，四，五号がこれにあたる．私などはずい分シャレた体裁だと思っていたのであるが，これは頁数がふえると技術的に無理があり現行の形をとらざるを得なくなったのであるが，第二五号から全体が左頁起しの横書となった為に表紙目次もそれにつれて横書きになった事と合せて四十年の歴史の中での止むを得ざる変更と受けとめている．

とは云うものの，上記二点を除いて四九号全部が同一様式だった訳ではない．復刊三号のみはそれまでのやり方を無視して色紙を使わず，頁数も異常にうすく，編集後記もない．面白いのはその次の四号の後記で，「前号の発行が甚だおくれ，又その出来栄えも甚だ感心出来ないものであった」と書いてあることである．何故そうなったか，はかくれたる英文学会誌秘話と云うことにしておこう．

この頃の印刷はあちこちの業者に発注しているが，旭印刷と云う社名がしばしば見られるのはのちにラグビー部監督をつとめた山本勘兵衛氏の家業であり，筆者の友人であったところからずい分無理を頼んだものである．さきに記した「白抜き」という表紙の印刷方式は「主流」というところだけがへこんでいて，あと表・裏表紙をひろげた面積に印刷インクがつく事になる．従って何でもない一寸したかすりが裏表紙などに白く出て来るという不体裁がおこる．そこで，彼山本君が「一寸高いが寄附したる」と云って銅凸版の表紙刷版を作って呉れ，他のどの業者に発注する時も英文学会編集委員会が保管しているそれを渡す事になっていたのであるが，今はどうなっているであろうか．

私事にわたるが，第二六号に「Evelyn Waugh の諷刺」と云うのを書いたとき，英語青年編集部から電話がかかって来て少し圧縮して書けと云う．そ

れはよいのだが，おどろいたのは数日して丁度結婚式の案内状のような厚地の紙に重々しく執筆依頼の文章が記されている封書が来た．きけばおもて表紙に執筆者の名前がのる論文のみに行なわれる事だと云う事らしいのだが，その权威主義にはほとほとあきれかえったのを思い出す．それでも『主流』を読んでいて下さる方があるのだと思いかえして何とか一文を草したのであるが，これが又論議を呼んで，思わぬ高名の英文学者数名から過褒の御言葉を載いたのも，今はなつかしい思い出である．